



6 林 業

項 目	作 業 内 容
(1) 植菌	<p>(今月の作業のポイント)</p> <p>植菌 植菌後の管理 シイタケ採取のための管理</p> <p>1月20日高松地方气象台発表の1か月予報によると、向こう1ヶ月の平均気温は、低い確率が70%、降水量は平年並みまたは少ない確率がともに40%とされている。このため、特に、気温が低い時期のシイタケ採取のための管理が必要である。</p> <p>また、最近のシイタケ情勢は、消費の国産志向などの追い風の中、単価も回復しているため、今後とも、安定植菌と単収の増大、品質向上に努めることが肝要である。</p> <p>2月から4月にかけては、玉切り・植菌・仮伏せ・本伏せ作業と採取・乾燥作業が重複し、一年間で最も忙しい時期であり、かつ、最も重要な時期でもあるので、要点をおさえた適期作業が出来るよう十分な計画が必要である。</p> <p>クヌギ等の原木を玉切りした後、直ちに植菌を行う。植菌数の標準は、原木直径をcmで表した数値を基にして、種駒では2～3倍（直径10cmの場合、20～30個）、成型駒では5～6倍（同10cmの場合、50～60個）である。なお、枝の切り口や死節、傷跡などの周囲には余分に植菌し、害菌の侵入を防ぐ（図1）。</p> <p>植菌時の注意事項は次のとおりである。</p> <p>ア 原木に植穴を開けたら直ちに植菌する。特に穴を開けたままの状態では雨にあてない。</p> <p>イ 植穴への植菌時、種菌の頭が樹皮と水平になるようにする。</p> <p>ウ 植穴の大きさ（直径）は、各種菌メーカーが指定している太さのキリ先を使用する。</p> <p>エ 作業中、種菌を直射日光や風にあてて乾燥させない。また、種菌にゴミやほこりを付けない。</p> <div data-bbox="619 1720 1264 1998" style="text-align: center;"> <p>植菌方法</p> <p>約1mの原木</p> </div> <p>図1 植菌方法</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) 植菌後の管理</p>	<p>植菌された種菌は、種駒も成型駒も乾燥すれば発菌が困難な状態となる。このため、植菌直後にまず、ホダ木全体がしっかりと濡れるまで散水を行い、引き続き降雨が無い場合は週2回の間隔で1回あたりホダ木全体が濡れるまで散水し、種菌の水分補給に努め、完全な活着を図る(写真1)。</p> <p>次に、低温と乾燥から種菌を保護するため、高さ30cm程度の棒積み等の仮伏せを行い、遮光ネット等で全面を被覆する。仮伏せの期間は、種駒では駒の頭がシイタケ菌で白くなる頃、成型駒では、木口に菌糸紋が出る頃までとし、遅くとも4月中旬頃には終了する。</p>  <p>写真1 植菌後の散水状況</p>
<p>(3) シイタケ採取のための管理</p>	<p>芽切りしたシイタケも気温が上がらないほど場では十分な成長が得られないため、次の管理を行う。</p> <p>ア ほだ場の上木の枝打・間伐を行い、木漏れ日が入るくらいにする。</p> <p>イ 風が強いほだ場では、防風垣(ネット)を設置する。</p> <p>ウ 散水施設があるほだ場では、暖かい日中に散水し、水分補給する。</p> <p>また、シイタケの成長のために袋かけを行なう(写真2)。</p>  <p>写真2 散水・袋かけの状況</p>

(作成 林業研究センター)